

岡本韋庵關係資料（四）

有馬 卓也

目次

- 【はじめに】
- 【凡例】
- 【一】年表・「韋庵岡本監輔氏年表」
- 【二】雜説・「岡本監輔氏」
- 【三】伝記・岸上質軒「岡本韋庵（樺太最近探索者）」
- 【四】雜説・佐田白茅「岡本監輔小伝附録荒井直盈」
- 【五】雜説・佐田白茅「岡本監輔支那遊歴の紀事」
- 【六】短文・『海国急務』序
- 【七】短文・『千島探検誌』序（以上（一））
- 【八】書簡・「林孝恂宛書簡草稿」
- 【九】短文・『大東合邦論』序
- 【十】短文・『史記評林補標準』序（以上（二））
- 【十一】日記・「千島義会発足当時の日記」
- 【十二】短文・「千嶋義会規則及予算表」
- 【十三】短文・「千島諸島の現状」（以上（三））
- 【十四】短文・「日魯交渉北海道史稿」序

- 【十五】関連史料・「北海道大和会設立大意及規則」
- 【十六】関連史料・「東洋哲学会大意及規則」
- 【十七】短文・「褒忠の缺典」
- 【一八】雜説・葛生能久「岡本監輔（対露・樺太探検）」

【十四】短文・『日魯交渉北海道史稿』序

岡本柳之助『日露交渉北海道史稿』（風月書店）

（明治三十二年）

岡本君柳之助、赤心憂國之士也。嘗有慨于北門管鑰之事、編次一書。曰『日露交渉北海道史稿』。來徵余序。展而閱之、自俄人始寇北辺、至近日細大事蹟、逐条分類、網羅無遺。一讀之下、乃覺彼進我退、日甚一日。以維新視天明寛政之間、固非同一世界、以今日視維新際、尤有甚焉者也。今日上下人々怠惰成風、每言及北門、遂巡畏縮弗置。唯論勢之強弱、不問義之如何。比諸徳川氏時、將有慙色難追逐。自今以往、世界愈縮、歲月益促。弱之肉強之食、不知何所底止也。有心

人読此書、安得不切齒扼腕。庶乎有大丈夫豪傑、警省発奮、首諸敵愾進取之策、以固結一國人心者耶。君近編制義勇隊、獲壯士數万人、將徙之於北海、從事耕漁、以鼓舞一世、挽回頹風。其於實際、亦可謂勞矣。余窃喜君之有此著。敢叙意見如此。至於義勇団利病、唯在君之約束如何。要之不可倣前輩散巨金誘惰民也。顧君必有成算焉。非余之所及也。

明治二十五年壬辰七月 阿波 岡本監輔撰

岡本君柳之助は、赤心愛國の士なり。嘗て北門管鑰の事を慨することありて、一書を編次す。『日露交渉北海道史稿』と曰ふ。来りて余に序を徴す。展きて之を閲すれば、俄^{オロシア}人の始めて北辺を寇せしより、近日の細大事蹟に至るまで、逐条分類し、網羅して遺すことなし。一読の下、乃ち彼進み我退くこと、一日に甚だしきを覚る。維新を以て天明・寛政の間を視れば、固より同一世界に非ず、今日を以て維新の際を視れば、尤も焉^なより甚だしき者あるなり。今日上下の人々は怠惰風と成り、毎に北門に言及するも、逡巡畏縮して置かず。唯だ勢の強弱を論ずるのみにして、義の如何を問はず。諸^{こゝろ}を徳川氏の時に比すれば、將に慙色ありて追逐し難し。今より以往、世界は愈いよ縮まり、歲月は益ます促す。弱の肉は強の食たること、何れの所に底止するかを知らざるなり。心ある人の此の書を読めば、切齒扼腕せざるを得ん

や。大丈夫豪傑の、警省（註一）発奮し、敵愾進取の策を首講（註二）して、以て固く一國の人心を結ばしむる者あらんことを庶^{わが}はんや。君近く義勇隊を編制し、壮士數万人を獲、將に之を北海に徙し、耕漁に従事せしめ、以て一世を鼓舞し、頹風を挽回せんとす。其の實際に於けるや、亦勞と謂ふべし。余窃かに君の此の著あるを喜ぶ。敢て意見を叙すること此の如し。義勇団の利病に至りては、唯だ君の約束如何に在るのみ。之を要するに、前輩の巨金を散じ惰民を誘ふに倣ふべからざるなり。顧みるに君必ず成算あらん。余の及ぶ所に非ざるなり。

明治二十五年壬辰七月 阿波 岡本監輔撰（漢文）

—註—

（一）目を覚ますこと。

（二）ここでは首唱に同じ。一番先に講じること。

【十五】関連史料・「北海道大和会設立大意及規則」

北海道大和会

（明治二十二）

北海道大和会設立大意

富岳 中に聳へて 巔 千古の雪を蓄へ、大海外を環て 浪八

洲の岸を洗ふ。敵国の壤を接する無く、天險の境を固める有り。

吁兄弟よ。洵に愛すべきの神州に非ずや。

是此神州、天氣は温和、地味は膏腴、山の芳卉を生ぜざる無く、野の嘉穀を産ぜざる無く、海の衆宝を出さざる無し。天此沃土を以て我等祖先に、三千年の昔に与へたり。吁兄弟よ。洵に愛すべきの楽境に非ずや。

是此楽境、幅員二万五千里、人口三千八百余万、天産既に富て、物貨を海外に仰がず、人工も亦美にして、製造を他邦に譲らず、勉むれば富み和すれば強し。吁兄弟よ。洵に愛すべきの美邦に非ずや。

是此美邦、天祖統を垂れ玉ひ、天孫緒を継ぎ玉ひて、万世一系、天地悠久、君の民を視玉ふこと赤子の如く、民の君を視奉ること父母の如し。是故に大義上に明に、名分下に定まり、禍乱起らず和平楽むべし。吁兄弟よ。洵に愛すべきの義風に非ずや。

是此義風、吹て天下に遍し。故に天下は古より車、軌を同くし、書、文を同くし、行、倫を同くして、万民一心、四海一家率い易く治め易し。吁兄弟よ。洵に愛すべきの仁俗に非ずや。

凡斯数者は、世界万国に絶て無くして、而して我が大日本国に独り有せる大宝なり。斯大宝を継続するを、名づけて大和魂と謂ふ。吁兄弟よ。愛すべきは日本国に非ずや。養ふべきは大和魂に非ずや。古人言ふ有り。天下の本は国に在り、国の本は

家に在り、家の本は身に在りと。若し夫れ人々良心を喪ひ、家々道德を失はば、則仁義の風は、忽ち狡獪の俗に變じ、天險の固めも、我等兄弟の要害に非ざるなり。天与の地も、我等兄弟の所有に非ざるなり。美邦の利も、我等兄弟の福利に非ざるなり。吁兄弟よ。印度の如き土耳其の如き、以て鑒戒せざるべけんや、以て恐懼せざるべけんや。是に於てか本会を設け、三千八百余万の兄弟と共に、斯大宝を護持継続して、以て上は皇天に報ひ、下は后土に酬ひ、中は祖先に答へんと期す。

吁兄弟よ人々斯大和魂を養ひ、家々斯日本国を愛せば、進では海外に雄飛すべく、退ては東洋に峙立すべく、以て世界万国に絶て無き所の大宝を、千億万世に伝ふべし。是斯会を設くる所以なり。兄弟に望む所なり。請ふ同心協力せよ。

神武天皇即位紀元二千五百四十九年

北海道大和会規則

第一章 綱領

第一条 本会は皇室を無窮に奉戴し、国家を無窮に維持するを以て主旨とす。

第二条 本会は日本国民を以て組織し、至誠を以て運動するものとす。

第三条 本会は国民の元気を養成し、且産業を拡張するを以て目的とす。

第二章 会

第四条 本会は北海道大和会と称し、地方の情況に由て分会を置くことあるべし。

第五条 本会は本部を北海道札幌に置き、其他を地方部とす。

第三章 会 員

第六条 本会々員を名誉会員・特別会員・通常会員の三種とす。

第七条 本会名誉会員は常議員（第十八条に見ゆ）の推撰を以て之を定むるものとす。

第八条 本会々員は一ヶ月会費として特別会員金二十銭・通常会員金十銭宛を、一月七月の両度に前納すべし。

但し名誉会員は会費を要せず。

第九条 本会に入会する者、別記書式の証書を出すときは、本会より其種会員の証牌を交付すべし。

但し特別に募集委員を派遣するときは、とゞち直に会員名簿に記名調印することを得。

第十条 会員中本会の体面を汚すべき行為あるときは、常議員半数以上の決議に拠て退会を命ず。

第十一条 退会する者は其事由を詳記し、会員の証牌を添へて本会に申出づべし。

第四章 役 員

第十二条 本会は総裁、正副会長各一名、本会幹事十五名、地方部幹事若干名を置く。

第十三条 本会総裁は会員の推撰を以て定め、其他は総会に於て撰挙す。

但し地方部幹事は地方会員の撰挙を以て定む。

第十四条 本会役員の任期は総て満一九年とし、再撰することを得べし。

但し欠員あるときは常議員会に於て補撰することを得。

第十五条 本会役員の職務を定むること左の如し。

一 会長は本会一切の事務を統理す。

一 副会長は会長を補佐し、時宜に因ては其代理を爲ものとする。

一 本会幹事は学務・産業・庶務・会計・編輯等の事務を処理するものとす。

一 地方部幹事は其地方の会務を処理して本部に報告するものとす。

第十六条 幹事は協議の上、書記を雇入ることを得。

第十七条 本会役員は総て無報酬とす。

但し事宜に因り相当の手当をなすことあるべし。

第十八条 本会特別会員中より常議員三十名を撰定し、本会重要の事件を協議す。

第十九条 本会員にして会務を帯び派遣の際は、必ず証明書を携帯せしむるものとす。

第五章 会 議

第二十條 本会は毎年八月総会を開て重大の事件を決定す。

第二十一條 常議員会は幹事半数以上の請求に拠て之を開くものとす。

第二十二條 毎月一回役員会を開く。

第六章 会 計

第二十三條 本会々業の資本金は各會員の義捐金を以て之に充るものとす。

第二十四條 本会の経費は會員より徴集する所の会費を以て之に供し、毎年総会に於て●決算を報告すべし。

第二十五條 本会委員派遣の際、納金を徴するときは、本会々計の印証を形態せしむ。若し携帶せざる者には納金を付与するべからず。

第七章 会 業

第二十六條 本会は文武学館を設け、會員の子弟を教育して立身の基を計るべし。

但し會員外と雖も無資力にして学業篤志の子弟に限り無謝儀を以て教育を施すことあるべし。

第二十七條 本会は殖産上緊要の事業を起し、一は本会の基礎を鞏固にし、一は會員の利便を計るべし。

第二十八條 本会は本道移住に關係する諸件の質問に応じ、且つ要路の諸商社と特約して會員中本道に移住せんとする者の利便を計るべし。

第二十九條 本会の主義を拡張し會員の胸懷を發表せんが為め、

毎月一回雑誌を發刊し、無代を以て會員に配布すべし。

第三十條 本会々員相互の親密を計らんが為め、地方の情況に

由て俱樂部を置くことあるべし。

本規則は常議員半数以上の意見に拠り、総会を開て其決議を経るにあらざれば改正増補することを得ず。

入会書（用紙半紙）

私 儀

今般貴会の規約に随ひ（何々会）員に入会致度此段申入候也

本籍何府県何国何郡区何町村何番地
寄留何府県何国何郡区何町村何番地

族 籍

年 月 日 姓 名 印

生 年 月 日

（数名全時に入会するとき
は連署するも妨げなし）

北 海 道 大 和 会 御 中

札幌区大通西九丁目一番地

北 海 道 大 和 会

【十六】 関連史料・「東洋哲学会大意及規則」

『東洋哲学会叢書（第一号）』（高橋光男発行）

（明治二十一年）

一 本会は西洋に所謂（ヨリリントールヒロソヒー）なる学問と
同主義にして、東洋古今固有の公道真理を拡張し、学者の方
向を改進するを目的とす。

一 本会は東洋哲学会と称す。

一 本会々員は学識宏遠・宿徳令名ある士をして会員とすべし。

一 賛成員は本会の旨趣に同意助力するものを以て賛成員とす。

但本会に向て疑義を質問し、又は自己の論説を草し、之
を本会に寄送し、会員の討論評定を乞ふことを得べし。

一 会員は毎月第三土曜日午後より集会し、本会學術進歩に關
する論説及び學術上の討論演説を為す。地方の会員は之を筆
記郵送すべし。

但賛成員は傍聴の爲め出席するを得。

一 賛成員は最初入会金として五拾銭を出すべし。本会よりは
賛成員たるの証券を送るべし。

但哲學誌発行の都度、一冊つつ講読するの義務あるもの
とす。

一 本会の拡張資金として、最初同盟入会の際に、金員を課出
し、之を以て其目的を達する資料となすべし。

一 入会手続は最初同盟の会員より紹介を得て、主幹或は惣会
員の許諾を経べし。

一 賛成員は何人を論せず府県住所姓名を細記し、入会金五拾
銭を添て事務所に申込みあるべし。

一 烏尾会員の意見書は本会全員と同感の旨趣に依り、本会の
旨趣とす。

一 烏尾小弥太君を主幹に指名選定せり。

一 本会の事務取扱所は当分府下麴町区上貳番町四十七番地に
仮定せり。

目今会員は左の如し

烏尾小弥太	千家 尊福	山岡鉄太郎	三島 毅
島地 黙雷	木田 九郎	南摩 綱紀	岡本 監輔
内藤 耻叟	長松 幹	有井 範平	石村 良一
指原 安藏	川合 清丸		

【十七】 短文・「褒忠の缺典」

『東洋哲学会叢書（第一号）』（高橋光男発行）

（明治二十一年）

仁義忠孝は万人固有の天性にして、一毫の人偽を容るるもの
に非ず。周孔の道（註一）は、此性に率ひて違ふことなきを第一
の要旨とす。之を外にしては謂はゆる学と云ふものあらざるな

り。仁義は道に於て包子^ちざる所なし。子の孝と臣の忠とは最も先務として説く所なれども、父の慈と君の礼とに至りて必しも然らざるものは、尊長を先にし卑幼を後にし、卑幼は尊長に従ひ教を受けて自ら修むるを主とするが為なり。其実は父子に親あり、君臣に義あるを、彼我完全の教とするなり。抑々^{そもそも}君臣の義は、父子の親あり夫婦の恩あると同じく、古今に亘り万国に跨^{またが}りて生人の一日も離るべからざるものたり。蓋し君の万民の上に立ち尊嚴を表するは、一身の榮を示すには非ず。即ち一国の民命を保するなり。君も臣も民命を保するをもて職とするものなれば、均しく法令を遵守せずばあるべからず。人をして法令を遵守せしめんと欲せば、上下の分を定め人を治むるものと、人に治めらるるものとの勢を異にして徳化流行の便を謀^{はか}べし。譬へば將帥と卒徒との如く、船將と船客との如し。船客の河海を航するものは、生命を船將に托し、船將の告示に従つて左右せざることを得ず。卒徒の敵兵に遇ふものは一身を將帥に委し、將帥の指麾に従つて進退せざることを得ず。將帥の令に従はず、將帥の教に従はずして、自ら肆^{はし}にするものは、同輩同伍の危険を致すのみならず、其身の覆溺を免れざること必せり。凡そ人は親疎の別ありといへども、均しく人類なり。禽獸の群を同うすべからざるが如きに非ず。況や一土に生れ利害損得の相関するものに於てをや。一国を創開し万世の太祖たるものより見るときは、一民も己が子孫に非ざるはなし。

殆ど親疎厚薄の言ふべきものあらざるなり。親疎厚薄は特に子孫より之が弁別を成したるのみ。されども古人も「君子之澤五世而斬」(註2)といはれたることあり。五世以上は君子に在りても之を親とすることを得ず。小人の如きは五世以上なる親の名字をも記憶するもの少し。之を他人に較するに何の異なるものあらんや。但先を念ふの心ありて、忘れながら忘るに忍びざるは天徳の固有にして、人々相保するの原則たればなり。故に政を為すにも徳を行ふにも、自然に輕重厚薄の順序ありて、親より疎に及ぼし、近きより遠きに達するは、天地の定理なること、人に頭脳心腹手足の別ありて、頭脳心腹の急なるときは、手足もて捍護(註3)するが如し。人は同一氣類にして、相互に保存生活すべき筈なれば、万国の交際といへども、親睦を旨とせざるを得ざるものなるに、彼我の祖先以来、一土に在りて正史相統し利害相関するものに於て、争^いか養生の法を堅定せざるを得ん。是は即ち君臣の義を正し、法令を嚴守せずばあるべからざる所以なり。故に君あり臣あるは衆の相保するに出でて、情理の自然に非ざるはなし。其性質を言ふときは、君は乾行の徳を体し、万民の模範となり、世をして漸く文明仁寿の域に進ましむるに在り。臣は坤道に則り、君の法令を奉じて、其及ばざる所を助くるに在り。されば君も臣も一向に誠を尽して、其職を全くすべきなり。世の君臣を論するもの、動^やすれば義を外なりとし、人意の私に出づとし、海外諸国共和の制などを主

張するもの多しといへども、君主民主となく同じく上下を分ち、君權もて法令を施行するものたるを察せざるは何ぞや。民主の変じて君主となり、其人威權の限りなきを致すものあるは、常に數の免るべからざる所たるを察せざるは何ぞや。一国に君臨すること久うして、益ます変ぜざるは祖考が余沢の民の骨髓に淪^レみたるにより、妄りに其の轍を易ふることに、華國人民の安堵しがたきを致すものあるを察せざるは何ぞや。世の論者は君主を暴悪なるものと認め、予め其惡を逆^ヒへて之を防制せんとするものの如し。是は變を知りて常を知らず。人我を併せて覆滅に帰するの術に非ざるはなし。蓋し一念の善惡も天地を感動するものたり。苟くも上に抗する心あり、先入して胸中に主となり、凝結して融けざらんには、易に謂はゆる「睽孤張^レ弓」(註4)と云ふものと何ぞ異ならんや。物は先づ腐ちて後に虫の生ずるあり。人は先づ疑ひて後に讒の入るあり。人主たらんもの何如に仁智なるも、^{いかに}争^いか己を疑へる民を疑はざらんや。疑の性を成したらんには、安くに往^ゆとしてか疑はざらんや。斯くて乱政敗を致さざるものは、理のあるまじき所なり。海外共和國の如き、多くは人主暴行の相続するに由りて之を致せるなり。或は五方人民の錯處せる勢によりて然るものあり。是は一事の良制なりといへども、永世に伝へて弊なきを信じがたし。況や其制に倣^{まね}ひて政を為すもの、覆轍相望むに於てをや。我邦の如きは神祖より以下五十世を経るまで、未だ嘗て親^みら獄訟を聴

くの風を改めず、嵯峨帝より以下二十五世を経るまで、死刑を用ひたることなし(註5)。其他にも屢次租税を免じたまへるなどの國中仁恕の風に厚くして、毫も慘毒の行ひなきは、三代諸國の比すべきに非ず。況や漢唐諸國に於てをや。況や其他に於てをや。斯る世界なるを知らて君臣の義を議するものあるは、自國を売^うりて人奴となるの説に非ざるはなし。況や政權を大臣に委^か子、公議を國人に決したまへる今日に於てをや。安そ一日も此義を忽^{ゆるが}にすることを得んや。此義は特に國の為にすと云ふに非ず。即ち其身の為にするなり。維新以来、朝廷に於て忠節を旌表したまへる特典あるが如きも、朝廷の自ら私したまふには非ず。即ち万民を保安するに在り。人民の身を朝廷に致すもの、安そ一身一家を保し、衆と相安ずるの道に非ざらんや。余思ふに今日朝廷褒忠の典は極めて厚く、固より間然すべきものなし。彼の和氣清麿・楠正成等(註6)の如き、神社の壮なる祀典の盛なる、尤も人心を奨励し、國基を鞏固にするの良図たり。高山仲繩・蒲生秀実等(註7)が如きも、尽く位階を賜はり、祭資を給せられぬ。維新後の力を國家に尽し、王事に死するものなどに至りては、一人の恩典に霑はざるはなし。其の人心世道の為に慮りたまへるもの、遠く且つ切なりと云ふべし。斯る盛世に居ながら、特に遺憾とするものは、日下部吾田彦^{あべ}と立入宗繼との二人(註8)に於て、未だ追

贈の典あるを聞かざるなり。二人の精忠なるが如き、固より追贈の特典を要するものに非ずといへども、学者の之を評論するものなく、大臣の之を建議するものを聞かざるは、今日の一大闕典と云ふべきに非ずや。吾田彦は仁賢・顯宗二帝（註9）の蒙塵に従ひ、二十六年の久しき臣節を尽くして懈らず。立入氏は足利氏の季年、皇室衰頹の折しも、屢次供御を献じ、織田信長を勧めて勤王の志を鼓舞したる人なり。吾田彦は千有余年を経る今日に至るまで、其節を表するものなく、宗継の子孫は徳川氏の末に至るまで非蔵人たるに止まるといふ。是は実に今日挙国人民の大遺憾と云ふべきものならずや。大道は一なり。父子の親も君臣の議も、分裂断割すべきものに非ず。道を講ずるものは、親義別序信の大本をして、一貫ならしむべし。是は孔孟の学に於て尤も要緊とする所たり。我が列聖の政に於ても、一日も忽せにせざる所たり。吾が一心に於ても、片時も離るべからざる所たり。今日万般の学芸は総て此に成し、漸く其道に進むべきのみ。安そ之を忽にすることを得んや。二子の事は皆て之を拙著の義勇芳規^マに掲載したることあり。此題を表して生徒の作文を試みたることありしが、孰れも忠節の高きに感じて一言の喙を容るるものなし。古今人心の同一揆にして国の為にし身の為にするは、天徳の易ふべからざる定則なるを徴するに足れり。今特に義勇芳規^マ。

の文を左に録し、大方君子の批評を請はんと欲す。余を妄なりといはんには、幸に示教を吝まざらんことを。

―以下『義勇芳軌』日下部吾田彦・立入宗継の抜粹〕略―

―註―

（1）周公旦と孔子が説いた道徳をさす。

（2）『孟子』離婁上に「孟子曰く「君子の澤は五世にして斬（た）え、小人の澤も五世にして斬ゆ。……」」とある。人の恩沢も五代もたてば消えてしまうということ。

（3）防ぎ守ること。

（4）『易』睽卦上九の「睽卦（そむ）いて孤なり。豕の塗（どろ）を負（つ）け、鬼を載すること一車なるを見る。先には之が弧（ゆみ）を張り、後には之が壺を説（お）く。寇（あだ）に匪（あら）ず。婚媾なり。往きて雨に遇へば吉なり」とあるのに基づく。ここでは孤立して猜疑心から攻撃的になっている様。

（5）嵯峨天皇の大同五年（八一〇）の薬子（くすこ）の妾における藤原仲成処刑から、後白河天皇の保元元年（一一五六）の保元の乱における源為義・平忠正処刑に至るまでの期間をさす。

（6）和氣清麻呂（七三三〜七九九）と楠木正成（？〜一三三六）。ともに勤王の忠臣として知られる。

（7）高山彦九郎（一七四七〜一七九三）と蒲生君平（一七六八〜一八一三）。ともに勤王の士として知られる。

(8) 日下部吾田彦は『日本書紀』に見える人物で、皇子時代の仁賢天皇・顕宗天皇を守ったとされる。立入宗継(一五二八〜一六二二)は朝廷のために尽力した商人・官人。

(9) 仁賢天皇は在位四八八〜四九八年。顕宗天皇は在位四八五〜四八七。

【十八】 雑説・「岡本監輔(対露・樺太探検)」

葛生能久『東亜先覚志士記伝(下)』(黒龍会出版部)
(昭和十一)

天保十年十月十七日阿波国美馬郡三谷村に生る。幼名は文平、後監輔と改め草庵と号した。嘉永六年十五歳にして徳島に出て岩本贅庵の門に入り、安政二年讃岐の国に至り藤川三溪の塾に留る。蓋し樺太探検の示唆を得たるは此の間にして監輔の手記には左の如くある。『藤川三溪翁の塾に食客たりし時、翁が一土人と談ずるを聞くに曰く、此を距ること一千里の北に一大島あり薩哈連といふ。其人は蜚鄙にして耕作を不知、専ら魚を捕り獸を獵して食とし、我邦船頭の至るを待ち、諸物を交換して衣類等に事缺かざるを得たり。海浜に昆布、魚類を積みて内地より齎^もせる諸物と交易するに当り、少許の酒を与ふるや大に喜び忘るること甚しく、内地より積載せる諸物若干に対して其物若

干を渡す可しと約束し、一つ二つと数へて十に至る時後に廻りて、オット親分と叫びつつ掌もて背を打つ時は、前に算へたるものは全く値を収めずして渡すこと常なり。彼地には余も往きて覩^みんことを欲すなり云々。』

安政三年、十七才の時、京阪地方に遊び藤沢東咳、池内陶所等の諸儒の間に寓し、清水谷中將の邸に在つて公子等に読書を授けた。文久元年江戸に出て幕府の儒官杉原晋斎の許^{もと}に起居したのであるが当年の手記に曰く。

『折に触れて薩哈連島の事を談じたることもありしかど、一概に蝦夷の事のみ風説する者ありて要領を得ず、文久元年季秋の頃に江戸に出でて儒官杉原晋斎の許に食客たりし折しも、下谷御成街道を過ぎて書林の架上に『北蝦夷図説』と題せる一書あるを見て手に取り開き展れば、土人其他の図等奇異なるもの多く、中にサガレンと書きたるを見て前後を細看し、北蝦夷は即ちサガレン島なるを知り、三溪が説の未だ確かならざるを悟り、終に之を購求し塾に帰りて細読して之を他人にも質問などし、彼地は元来皇国の属地にて近き頃より俄羅^{ロシア}西人などの出沒することあり、幕府も深く心配せられたる事実なるを知り、速に往て居住し永く土人となるも終に必ず其地を開拓し、北門の鎖鑰を蔽にせまほしきものなりとの志の起りにき』と。

かくて文久三年の春、樺太探検の途に上り、同年八月単

身宗谷を経て樺太久春古谷なる調役日野忠助の許に投じ、東岸鵝城を経て独木舟でシルトタンナイまで至り露人の経営を観察し、幕府から樺太在住の令を受けて敷香に赴任した。此の年函館奉行小出大和守に次の如き樺太開拓に関する建議書を提出した。『開拓殖民の基礎の真諦として、婦人の有罪者を驅りて移住せしめ、夷民と往来交歓すれば、則ち其教化の日は指を屈して待つ可きなり。』と。甚だ色つばい殖民政策である。慶応元年四月、足輕西村伝九郎と共に真知床（北知床岬）を廻はり、東海岸に沿ふて北上、六月樺太の北端ガウト岬に達し、ボントナ・ウシカ、タムラオーの諸処を廻航して黒龍江口に至った。更に東韃地方を探検して露人及滿人を究めんとしたが果たさず、其儘間宮海峡を通過して西岸の各所を観察し、前人未だ企及し能はざるの樺太週航の画期的偉業を完成した。

明治元年潤四月函館裁判所権判事に任ぜられ、樺太の楠溪に駐在して、鋭意開拓に努力し、此の間明治二年六月、テフラートウィツチ中佐の軍艦一隻を率ゐて太泊に強行上陸するあり、以来露人の来寇甚だしく北門の急を叫んで樺太の死守を試みんとしたが、黒田清隆の北海道本位の漸進主義と正面衝突して遂に辞職した。明治六年陸軍省参謀局編纂課の囑託となり、豫て抱懷してゐた清国と合縦して、以て西欧の勢力の東方に延びんとするに当たらんとし明治

七年在官の儘上海に航し北京に抵つたが、当時台湾事件勃発して我国との間に隙を生じてゐたため清人危惧して広く接するを得ず空しく帰朝したのであつた。明治八年再び清国に航して合縦を説き、六月北京に、七月盛京（奉天）を訪れたのである。當時の詩に曰く。

韓界五百里。 郭羅二千里。

居民五十万。 瓦屋如櫛比。

南控遼陽城。 一望千里乎。

地形既雄豁。 物類自豐盈。

有懷覺羅氏。 此間連旌起。

兵馬精且強。 睥睨保高壘。

北虜与南人。 弱国聞声奔。

豐公意非討。 君独車服尊。

觀風何所得。 東瞻思無極。

瀋陽夕曛中。 大鶚飛自北。

更に途を中支にとつて武昌に出て、上海を経て帰朝したが、其企図する政策は未だ実現の可能を見るに至らなかつたけれども、日支提携の先覚として異常な好感を与へた。特に文人墨客の間に知友を得、彼が携へた椿山記なる詩は彼の志士文客に愛賞唱和されたのであつた。

椿山記

我生南海浜。

抗志在四辺。

読書領_二大略_一。 經綸眇前賢。
 孔顏憂世意。 管樂濟時功。
 空談無_レ所用。 咄哉仰_二蒼穹_一。
 一旦拋_二筆硯_一。 單身赴_二窮北_一。
 周遊三万里。 慷慨思_二報國_一。
 畸迹人怪異。 呼為狂夫魁。
 叨榮嘗有_レ日。 何知非_二其戈_一。
 小人嘗_二我拙_一。 君子笑_二我迂_一。
 骯髒從成_レ性。 樞門懶_二奔趨_一。
 謁來三五載。 結_レ茅樁山傍。
 林泉多_二逸興_一。 暫將_二與_レ世忘_一。
 独往柔桑下。 緬想臥龍公。
 豪氣除不_レ得。 朗吟吐_二長虹_一。
 避_レ賢信_二長策_一。 猶病死無_レ間。
 擬持杞人說。 敢于聖哲君。
 祇_二当_二吾分_一。 何暇及_二身圖_一。
 死所且無_レ挾。 毀譽豈足_レ處。
 經營十數畝。 嘉樹雜_二蘭芷_一。
 不_レ識百年後。 幽賞属_二誰子_一。
 皎々池辺月。 宛々樹頭花。
 千秋同一覩。 此心又何加。
 人生如_二朝露_一。 大千亦劫空。

争似此心楽。 與_レ天一_二無窮_一。
 居_レ貧知_二官貴_一。 行遠懷_二室安_一。
 常情徒自累。 葆真豈不_レ難。
 慇懃同好者。 為_レ我患_二德音_一。
 德音在_二懷抱_一。 不_レ啻萬黃金。
 其後育英と著述に没頭し、明治十年には東洋新報を発刊（十一年十二月廃刊）、十四年には大学予備門の教諭、十九年には第一高等中学校和漢文教授の囑託を命ぜられたが、明治二十四年時事に感じて千島に航し、翌年千島義会を創立したが遂に惨憺たる失敗に終つた。かくて再び育英事業に歸り、明治二十七年徳島県尋常中学校長、三十年台湾総督府国語学校教授に歴任したが、明治三十三年十一月三度び清国に航して翌年まで杭州、武昌に遊びて帰朝、明治三十四年二月北京警務学堂の聘に応じて約八ヶ月間、学堂に教鞭を執つた。其後は各所を貧窮裡に転々とし又時運に際会せず、明治卅七年十一月九日小石川諏訪町の陋巷に『旅順は未だ陥落せぬか』との絶叫を残し雄志を抱いて空しく逝いた。享年六十六。常楽院法雲韋庵居士の法号を以て、麻布笄町長谷寺に葬られた。

（漢詩の返り点はいずれも原文による）